

指揮棒の静止の一瞬秋気澄む

幸

音楽ホールの室内スペースか野外音楽堂のオープンスペースかは知らないが、作者は指揮者のタクトに導かれ、次々と紡ぎ出されて行く楽曲の調べに聞き入っている。楽曲の途中の章の末尾か、楽曲の最終章の末尾かは知らないが、タクトが静止した。その瞬間に作者は秋気を感じ取ったのである。

音楽会から詩句を抽出しようとする試みは既に色々となされているが、作者は指揮棒が止まる一瞬を捉えて一句をなしたのであ

湯上がりの水のうまさや月を待つ

友子

軽い脱水状態にある湯上がりの直後、普段飲む水が美味く感じられるのは、誰にでも共通した生理的感覚である。その中で作者は月が上がるのを待っているのである。

この好ましい生理的感覚の世界に、名月をこれから眺めるといふ豊かな精神的世界が繋がっているのである。まさにこの句の手柄は、「湯上がりの水」という普通の生活のなかに現われる些事を、句の導入部に据えることである。通常の暮らしの中の月見が、肩の力を抜いて、さらりと詠まれている。

船乗りの元町が好き敬老日

貞勝

「元町」と言えば、横浜の句会では「横浜の元町」を直感するであろうが、神戸の句会では「神戸の元町」が念頭に浮かぶであろう。横浜も神戸も幕末に開国を求められて外国に開かれた港である。元町はその中心地として繁栄した界限であり、内外国の船が帰港や寄港する度に、町には多くの船員が溢れ、賑わいを続けた。「船乗りは元町が好き」という断定のフレーズに、元船乗りだけでなく、作者自身の「元町」に対する愛着も含まれている。

蕎麦の花土蔵ほろほろ土こぼす

貞勝

土蔵の壁から土が零れることは、その土蔵が建てられてからの歳月の長さを想起させる。古い土蔵の背景として蕎麦畑を配置し、その畑に蕎麦の白い花が揺れていると言っているのである。

日本の懐かしい田園風景であり、古典的な句立てではあるが、この句が成功しているのは、土がこぼれる様をあらわす擬音語に「ほろほろ」を用いたことであろう。この「ほろほ

ろ」によって句にリズムが生じ、また、その情景を味わい深いものになっている。

端正に積まれし薪の数知れず

ヤエ子

山家の納屋廻りの風景であろう。厳しい冬に備えて沢山の薪が壁際に高く積み上げられているのである。太さや曲がり方がまちまちの薪、あるいは薪の束を崩れることなく、所定高さまで積み上げるには、薪あるいは薪束の向きや積み上げ順序を適宜変更する必要がある。そのような作業を丹念に進め、薪を整然と積み上げたところに、その山家の主の端正な生き方も見えて来るようだ。

風抜ける坂の途中の青みかん

友子

坂の片側あるいは両側に蜜柑畑が広がっている。しかしながら、その蜜柑畑の蜜柑が未だ青いというだけでは、平板的で単様な句に終わってしまう。この句の工夫は、「風ぬける坂」として「坂」を特徴づけていることにある。「風抜ける」という措辞を置くことによって、この句は視覚の世界に嗅覚の世界を重ねた重層的なものとなっている。その坂の途中にいる作者には、青みかん特有の爽やかな匂いが立ち上って来る。

廃村のねずみ返しや秋旱

ヤエ子

作者の観察眼は細かなものにも行き届いている。豊作のときの「ねずみ返し」としたのでは、豊かな実りの収穫物を鼠の食害から守っているという普通の句に終わってしまうが、この句のポイントは下五に「秋旱」を配したことにある。不作を連想させる「秋旱」によって、「ねずみ返し」がより切実なものとして立ち上がって来る。上五の「廃村」によってこの感興はより高くなるが、これでもかこれでもかというダメ押しの面もあるので、たとえば「一村」と言うように軽く流す方法もある。

縁側は無けれどペランダ月見かな

溪水

諸般の事情によって自然から切り離された場所に生活の本拠を求めざるを得ない、現代社会を投影した一句である。土に接した縁側で月見をしていたならば、虫の声も大きく耳に届いて来るであろうが、上階になればなる程、ペランダで月見する者には虫の声は小さいか殆ど届かない。逆に言えば、月見に集中することができるとも言えるが、草木のざわめき、虫の声のある自然状態の月見に憧れを持つ。

児童等の歌声に気の九月かな

眞三

「氣の九月」という表現に若干の分かり難さもあるが、「氣」は「氣が入っている」、「氣力がこもっている」の「氣」であろう。

夏休み明けの九月、音楽教室から流れてくる歌声に児童の「氣」を感じる作者は、実生活においても氣力横溢した時間を過ごしているのであろう。

会場・桜蔭会館 文責・増田 守